

ベン・ジョンソン「バーソロミュウ市」試論

佐々木 和 貴

A Study of *Bartholomew Fair* by Ben Jonson

Kazuki SASAKI

Abstract

In Ben Jonson's *Bartholomew Fair*, Wasp, Busy and Overdo who represent some authority must undergo hardships through the fair and surrender their authoritative attitudes. In this paper I specify the meaning of their ordeals by examining their resemblances to the rites of passages. Then in this anthropological approach I identify Jonson's vision of the free and equal relationship between men, which is the core of this comedy.

序

ベン・ジョンソンの代表的喜劇「バーソロミュウ市」で、市を訪れる人々は、皆試練を受けるが、なかでも、何らかの権威を代表するワズプ、ビジー、オーバードゥの三人が受ける試練は、その権威者としての役割を、断念せざるをえないほど苛酷なものである。そこで、その意味を問うて、様々な風刺や寓意などを読み取る解釈が、これまで行われてきた⁽¹⁾。

本稿では、彼らの試練のプロセスが、文化人類学で「通過儀礼」と呼ぶ儀礼と、よく似たパターンを踏んでいることに注目したい⁽²⁾。この通過儀礼という下敷きを当ててみることによって、彼らの試練の意味を、新しい角度から考察することが、可能であると思われる。

まず議論に先立って、通過儀礼について、簡略に説明しておくことにする。

いかなる形態の社会においても、個人の人生は、ある年代から他の年代へ、ある仕事（役割）から他のものへの、一連の通過から成り立っている。文化人類学では、こうした通過の際、類似したパターンと機能をもつ儀礼が、多様な社会で行われることに着目し、それらをまとめて通過儀礼と呼んでいる。この儀礼は、一般に、次の三段階を追って進む。第一は「分離段階」で、儀礼の主体は、何らかの象徴的行為によって、以前の日常生活から切り離される。第二は「移行（境界）段階」で、儀礼の主体は、以前の存在形態と、来たるべきそれとの間の曖昧な状態にあり、そこでの種々の体験を経て、新たな存在形態にふさわしい知恵や認識が、形作られることになる。第三は「再統合段階」で、儀礼の主体は、以前とは異なる認識を有する社会的存在に生まれ変わり、再び日常生活へと、儀礼的に戻されることになる⁽³⁾。

以上の説明を踏まえた上で、三人の権威者達の試練について、順次に、考察していきたい⁽⁴⁾。

ワスプの試練

ハンフリー・ワスプは、三人のなかでは登場も一番早く（I. iv）、権威者としての役割から引きずり降ろされるのも一番早い（V. iv）。また、代表する権威も一番低いものである。

愚かな若者コークスのお守り役を勤めるワスプにとって、パーソロミュウ市は、コークスをあらゆる形で誘惑する、危険に満ちた場所である。従って、ワスプは、市に来る前からすでに苛立っているのだが、市へやって来るや、度重なるコークスの愚行に対して“A resolute fool you are, I know, and a very sufficient coxcomb, with all my heart; nay, you have it, sir, an'you be angry, turd i'your teeth.”（III. iv. 36-38）⁶⁾と怒り心頭に発して、教師としての権威を振りまわさざるを得なくなる。ところがこうして、権威に頼って他人を叱責してきたワスプに、突然最初の試練が訪れる。彼は、市の住人達の“game of vapors”に巻き込まれてしまうのである。これは、ジョンソン自身が“every man to oppose the last man that spoke, whether it concerned him or no.”（IV. iv. 29）と説明している通り、言わば、相手の発言の権威を一切認めないことで成り立っている遊びである。典型的箇所を引用してみよう。

Wasp

Nay, then, I do think you do not think and it is no resolute vapor.

Cutting

Yes, in some sort he may allow you.

Knockem

In no sort, sir, pardon me, I can allow him nothing. You mistake the vapor.

Wasp

He mistake nothing, sir, in no sort.

Whit

Yes, I pre dee now, let him mistake.

Wasp

A turd i'your teeth, never pre dee me, for I will have nothing mistaken.

Knockem

Turd, ha, turd? A noisesome vapor; strike Whit.

They fall by the ears.

（IV. iv. 98-107）⁶⁾

このようにワスプは、自分の権威に相手が服さないことに苛立って、遊びのはずが本気で喧嘩を始めてしまうのだ。さらに、止めに入って彼を叱責するオーバードゥ夫人にも“Upon your justice-hood? Marry, shit o'your hood; You'll commit? Spoke like a true justice of peace's wife, indeed, and a fine female lawyer! Turd i'your teeth for a fee, now.”（IV. iv. 142-4）と、公然と反抗する。このとき、ワスプは、平常の役割（仕事）を、完全に逸脱してしまったと言えるだろう。市の住人と殴りあい、雇い主の夫人を罵るという行為によって、彼は、家庭教師という自分が社会構造に占めていた地位から、降りてしまうのである。そしてこの状態に呼応するかのように、忽ち現れた警吏によって逮捕されたワスプは、これから一人ぼっちで市をさ迷うことになるのだ。つまり、彼の最初の試練は、ある象徴的行為とそれに伴う日常生活からの分離という、通過儀礼の第一段階に、正確に対応しているのである。

次に市に現れたワズプは、足枷をかけられて、晒しものにされるといふ、第二の試練に耐えねばならない。これが、教師という常に権威を行使する仕事に慣れてきたワズプにとって、いかに屈辱的な体験であるかは、想像に難くない。のみならず、かれはこの惨めな姿を知人のクォーラスに見られてしまう。

Quarlous

How now, Numps?

Wasp

It is no matter how; pray you look off.

Quarlous

Nay, I'll not offend you, Numps. I thought you had sat there to be seen.

Wasp

And to be sold, did you not? Pray you mind your business, an' you have any.

(IV. vi. 50-55)

この二重に屈辱的な体験は、自らを支える権威を根底から覆されるという点では、ワズプにとって、自我の解体＝死を意味するほどの試練であろう。ところが、通過儀礼の移行段階においても、必ず「殺害や死を象徴するメタファー」⁷⁾が、出現するのである。通過儀礼においては、生物学的生から死へというプロセスとは逆に、人は死を経て再生へというプロセスを体験するのだ。従って、この晒し台での精神的「仮死体験」を経たワズプは、移行段階を終え、以前の権威主義的な存在から、新しい知恵を授けられて生まれ変わるために、必要な準備が整ったと言えるだろう。ワズプは、パーソロミュウ市を、このように、まさに通過儀礼として体験しつつあるのである。だが、ワズプが、この儀礼を全て完了するためには、当然予想されるように、今一度の試練を経ねばならない。

晒し台を抜け出した後、迷った末にパベット・ショウにたどり着いたワズプは、そこでようやく見つけたコークスに対して“Do you hear, sir? Are you employed, that you are bare-headed and so busy?” (V. iv. 92-4)と、いつもの口調で叱責する。彼は、以前の権威を回復し、教師としての仕事を継続しようとするのである。しかし、晒し台での屈辱的体験を既に知っているコークスに“Hold your peace, Numps; you ha'been i'the stocks, I hear.” (V. iv. 95-6)と切り替えされると、“Does he know that? Nay, then the date of my authority is out; I must think no longer to reign, my government is at an end.” (V. iv. 97-99)と言わざるを得ない。彼は、教師としての権威が教え子にもはや通用しないこと、つまり、パーソロミュウ市を経る前と後では、自分の役割、すなわち社会的存在形態が、根本的に変わってしまったことを、認めざるを得ないのである。そして、彼のこの台詞は、“He that will correct another must want fault in himself.” (V. iv. 99)という、ある意味ではこの劇の主題を象徴するような、謙虚な認識で締めくくられる⁸⁾。こうして、以前では考えられないこの新しい知恵を授けられたとき、彼にとっての通過儀礼の再統合段階が、完了したと言えるだろう。市での試練を経て、自らの権威というものを見つめ直したワズプは、教師という権威に頼らない人間関係を学び、この後、新たに生まれ変わった存在として、日常生活に戻っていくことになるはずである。このように、市でのワズプの試練のプロセスは、彼の断念する権威が、一介の家庭教師という、ビジーやオーバードゥに比べて些細なものであるため、深刻さは欠くものの、そこに、通過儀礼とよく似たパターンが、はっきり認められるのである。

ビジーの試練

ジュール・オブ・ザ・ランド・ビジーは、その登場も (I. vi), 敗北も (V. v), 三人のうち二番目である。また、代表する権威も、オーバードゥよりは低い、ワズプよりは、はるかに高い。

ビジーは、清教徒の指導者として、信者達に絶大な宗教的権威を有しており、しかもそれを、ワズプ同様、濫用あるいは悪用している。たとえば、怪しげな理屈を付けて、市へ行くことのみならず、市の名物の豚の丸焼きを食うことまで、正当化してみせたり (I. vi), 市の屋台で牛飲馬食したりする姿は (III. ii), 自らの宗教的権威を利用して、信者達を食物にしている彼の日常的布教活動を、ありありと垣間見せてくれる。

こうした、自信満々のビジーの宗教的権威に翳りが生じるのは、彼が、その権威を笠にきて、屋台をひっくり返したときである。

Busy

And this idolatrous grove of images, this flasket of idols! Which I will pull down—
Overthrow the gingerbread.

Trash

O my ware, my ware, God bless it.

Busy

— in my zeal, and glory to be thus exercised. (III. vi. 90-93)

これは、ビジーにとっては熱列な信仰の表現であっても、市の住民達にとっては迷惑この上ない行為であり、彼はワズプ同様、たちまち警吏に拘束されてしまう。こうして、信者達から切り離されて、彼の権威など歯牙にもかけない人々に捕らえられたビジーは、社会構造において彼の占めていた、宗教的権威者という地位から、引きずり降ろされてしまったと言っていいだろう。つまり、ビジーの最初の試練も、ある象徴的行為によって、以前の属性を失うという、通過儀礼の第一段階のパターンを、なぞる形で終了することになるのである。

次に登場したとき、ビジーはワズプ、オーバードゥとならんで、足枷をはめられ、晒しものになるという、第二の試練を受けねばならない (IV. vi)。これが、権威に慣れきっている人間にとっては、精神的「死」を意味するような屈辱的体験であり、通過儀礼の移行段階に相当することは、ワズプと同様であろう。だが、相違点もある。ビジーは、この試練の意味について、ワズプほど無自覚ではない。ワズプが、試練の目撃者クォーラスに当たり散らすだけなのに対して、ビジーは、目撃者の信者ピュアクラフトに、自分の試練を “it is my calling, comfort yourself, an extraordinary calling, and done for my better standing hereafter.” (IV. vi. 108-110) と、一種の殉教として、説明しているのである。殉教が、「死」を経て天国への「再生」というパターンを踏む点で、一種の通過儀礼ともみなしうる以上、ビジーは、ある程度まで、自分の試練の意味を理解していたと考えていいだろう。しかし、その理解は、飽くまで、自分に都合の良い、表面的なものである。その証拠に、晒し台を抜け出すときも、彼は “We are delivered by miracle; ... The malice of the enemy hath mocked itself.” (IV. vi. 154-6) と、相変わらず、宗教的権威を持出してきて、以前の彼の存在形態にしがみついている。逆に言えば、この宗教的権威が、完膚なきまでに覆されたときに初めて、彼は自らの試練の真の意味を理解し、新しい存在に生まれ変わるはずである。しかし、そのためには、ビジーは、今一度試練を受けねばならない。

市をさ迷って、ビジーもワスプ同様に、最後にパペット・ショウにたどりつく。そこで彼は、開口一番“Down with Dagon, down with Dagon! 'Tis I will no longer endure your profanations.” (V. v. 1-2) と叫び、ショウの中止を迫るのである。しかし、宗教的権威を盾にとるビジーに対して、人形使いのレザーヘッドは、その権威に心服しないどころか“But here's one of my motion, Puppet Dionysius, shall undertake him (Busy), and I'll venture the cause on't.” (V. v. 31-3) と、人形の口を借りて、自信満々論争を挑んでくる。これに対してビジーも“I will not fear to make my spirit and gifts known!” (V. v. 38) と受けて立ち、ここに、人間対人形の、世にも珍奇な論争が始まる。だが、ビジーにしてみれば、これはその滑稽な外観にもかかわらず、かなり真剣な論争のはずである。二度の試練で揺らぎつつある自らの宗教的権威を守り、自信を回復するため、この論争は、彼にとって必要な手続きであったとさえ、言えるかもしれない。まずビジーは、当時の清教徒の演劇に対する非難を踏襲して、“I say it (puppet show) is profane, as being the page of pride and the waiting-woman of vanity.” (V. v. 71-72) と主張する。これに対して人形＝レザーヘッドは、

What say you to your tire-woman, then? . . . Or feather-makers i'the Frairs, that o'your faction of faith? Are not they with their perukes and their puffs, their fans and their huffs, as much pages of pride and waiters upon vanity? What say you? (V. v. 76-78)

と、清教徒もまた、瀆神的な職業に就いていることを指摘するのである。そこで言葉に詰まったビジーは、非難の矛先を変えて“my main argument against you is that you are an abomination; for the male among you putteth on the apparel of the female, and the female of the male.” (V. v. 87-8) と、これまた当時お馴染みの論点を持ち出してくる⁹⁾。ところが、この非難に対しても、人形＝レザーヘッドは“it will not hold against the puppets; for we have neither male nor female amongst us. And that thou may'st see, if thou wilt, like a malicious purblind zeal as thou are!” (V. v. 92-4) と予想外の反論をし、実際服を脱いで見せる。さすがのビジーも、この余りにも明白な反証の前では、“I am confuted; the cause hath failed me.” (V. v. 101) と、兜を脱がざるを得ない。清教徒の大義名分“the cause”が自分を裏切った“failed”という、苦い認識を受け入れざるを得ないのである。そして、この深刻な衝撃によって始めて、ビジーは、パーソロミュウ市での自分の試練の真の意味に気がついたに違いない。その証拠に、人形＝レザーヘッドに“Be converted, I pray you, and let the play go on!” (V. v. 103) と促されたビジーは、意外なことにも“Let it go on. For I am changed, and will become a beholder with you!” (V. v. 104-5) と、大人しく同意するのである。常に宗教上の権威者として、人々に上から接してきたビジーが、その権威の源である清教を捨て、一観客として人々と横に並ぶというのである¹⁰⁾。彼もまた、パーソロミュウ市という通過儀礼を経ることで、宗教という縦の権威に頼らない平等な人間関係について、新しい知恵を授けられたと言えるだろう。そして、この再統合段階を終えて日常生活へ戻っていくビジーが、この後、以前とは異なった認識を持つ、社会的存在に生まれ変わることは、恐らく、疑いのないところであるものと思われる。このように、ビジーの市での試練のプロセスも、通過儀礼の諸段階に、かなり正確に対応するのである。また、徹底して戯画化されて描かれているため、非常に喜劇的印象は与えるものの、その敗北は、担っている権威がワスプに比べて高い分だけ、複雑で、深刻なものになったと言えるだろう。

オーバードゥの試練

アダム・オーバードゥは、登場するのも一番遅く（Ⅱ. i）、降伏するのも最後である（Ⅴ. vi）。また、その代表する権威も、三人の中では一番高い。

オーバードゥは、簡易法廷の判事として、国家権力を代表し、社会構造の頂点に近いところに、安定した地位を占めているはずの人物である。ところが彼は、パーソロミュー市で起こる“enormity”を、自らの手で告発するべく、マッド・アーサーなる狂人に身をやつして登場してくる。つまり、オーバードゥは、最初から、自分の権威を捨て、自らの社会的身分から逸脱してしまっているのである。従って、他の二人とは異なり、彼は変装という象徴的行為によって、あらかじめ、以前の日常生活から切り離されていると言えるだろう。言い換えれば、彼は、市に出かける前に、分離段階を済ませてしまっており、市を通過儀礼として体験する準備が、既に出来ていたのである。のみならず、彼が仮面に選んだマッド・アーサーは、市の住人に“Tis mad Arthur of Bradley, that makes the orations. . . Welcome to the Fair! . . . I ha'been one o'your little disciples i'my days!”（Ⅱ. ii. 117-122）と、呼び掛けられるところから明らかなように、その“orations”によって、人々に精神的影響を与える存在である。この狂人として社会構造の底辺に位置しながら、同時に神秘的力を備えた両義的存在であるマッド・アーサーが、自分からその属性を放棄してしまったオーバードゥの、市での曖昧な状態を象徴するのに、考える最もふさわしい仮面であることは、言うまでもないだろう。

こうして、狂人として市をさ迷ううちに、オーバードゥは、他の二人にもまして、厳しい試練に会うことになる。まず、彼は、コークスの財布盗難の場にいたため、すりの一味と間違えられ、ワズプに殴りつけられ、命からがら逃げ出すはめになる（Ⅱ. iv）。次に、コークスの二つめの財布盗難の場に再び居あわせた彼は、今度は犯人として逮捕され（Ⅲ. v）、ワズプ、ビジーと並んで、足枷をされ、晒しものになるという試練に、耐えねばならない（Ⅳ. i）。これらの一連の肉体的精神的試練が、通過儀礼の移行段階に付きものの仮死体験に相当することは、ワズプ、ビジーと同様であろう。特にオーバードゥの場合は、日頃人を裁く側だけに、罪人扱いされたこの試練は、大変な衝撃であったに違いない。また、例えば、著名な人類学者V・ターナーは、通過儀礼の移行段階での儀礼の主体の体験について、「彼らは、文句も言わずに気紛れな懲罰を受けねばならない。彼らは、あたかも、新しく形づくられるために同じ条件に変えられすり減らされるかのようであり、また人生の新しい情況に自分を適応させる新しい力を授けられるかのである。」⁽⁴⁾と述べているが、これは、とりわけオーバードゥの試練に、ぴったり当てはまる説明であるように思われる。というのは、他の二人と違って、この移行段階において既に、彼のうちには、新しい認識が授けられつつあるように見えるからである。警吏達がそれと知らずに、自分のことを噂するのを、晒し台の上で聞いたオーバードゥは、“I will be more tender hereafter. I see compassion may become a justice, though it be a weakness, I confess, and nearer a vice than a virtue.”（Ⅳ. i. 74-6）と、言わば精神的仮死状態において、裁かれるものへ、優しいまなざしを向けるようになるのである。のみならず、彼はこの憐れみの心“compassion”から、自分の厳格さゆえに発狂した元廷吏のトラブルオールに、償いとして白紙委任状を与えさえる。以前の彼では、およそ考えられなかったことだろう。しかし、この新しい認識が本当に彼のものとなるためには、オーバードゥも、今一度、厳しい試練を経なくてはならない。

他の二人同様、市を巡って最後にパペット・ショウにたどりついたオーバードゥは、ビジーの敗北の直後、全員を前にして“Stay, now do I forbid, I, Adam Overdo! Sit still, I charge you.”（Ⅴ. v. 108-9）と、遂にその正体を露す。その姿は、以前彼が“I will break out in rain and

hail, lighting and thunder, upon the head of enormity.” (V. ii. 4-6)と自らを喩えた、ジュピターの如き威厳に満ちている。しかし彼は、自分の開廷したこの臨時法廷で、裁く側に長く留まり続けることは出来ない。仮面を捨て、判事としての以前の仕事(役割)に戻ろうとした彼のもくろみは、取り調べが進むうちに、もろくも打ち砕かれてしまうのである。彼が救おうとした“innocent young man”が、実はすりの元締めだったこと、彼が白紙委任状を与えたのは、トラブルオールではなく、変装したクォーラスだったこと、彼の妻が、彼の知らぬ間に“Bartholomew-bird”, すなわち売春婦の仲間入りをしていたこと等が、次々に明らかにされるのだ。そしてこの臨時法廷は、クォーラスの、判事オーバードゥに対する“remember you are but Adam, flesh and blood! You have your frailty; forget your other name of Overdo and invite us all to supper.” (V. vi. 94-6)という判決で、幕を閉じることになる。裁くはずのオーバードゥが、逆に裁かれてしまうのだ。そして、たとえ、ジュピターの如く高みから人々を裁く権威を授けられていようとも、彼もまた裁かれる人々同様に弱点“frailty”を持つ、生身の人間“Adam”に過ぎないのだという、この自らに下された厳しい判決に答える形で、オーバードゥが

... my intents are ad correctionem, non ad destructionem; ad aedificandum, non ad diruendum. [for correction, not destruction; for building, not for ruining.]

(V. vi. 108-9)

と結びの台詞を言うとき、我々は、彼が、最後の試練を経て遂に、新しい知恵を自分のものにしたことを知るのである。裁かれるものへの優しいまなざしが、自らも裁かれる人間の一人に過ぎないという認識へ、一段と深化したのだ。そして、この認識と共に、判事の職務は“ruining”ではなく“building”にあることを、了解し得たとき、オーバードゥの再統合段階は終了したと言える。パーソロミュウ市という通過儀礼を経たオーバードゥは、判事という権威の高みからは決して得られなかった、人間相互の関係についての新しい知恵を得て、以前とは全く違う認識を持った存在に生まれ変わり、日常生活へと戻っていくことになるだろう。

このように、オーバードゥの試練のプロセスには、他の二人にもまして明瞭に、通過儀礼のパターンが読み取れる。また、その担っている権威が、最も高いだけに、その降伏も、三人のうちで、最も複雑、かつ劇的に描かれていると言えるだろう。

結 語

以上、通過儀礼という下敷きを当ててみることによって、ワズプ、ビジー、オーバードゥという三人の権力者の市での試練には、分離→移行→再統合と、それに伴う新しい認識の獲得という、共通のパターンが存在することが明らかになった。また、このパターンを通して、上からの権威による押しつけでない、自由な人間同志の平等な共生関係という、ジョンソンがこの劇で描いてみせた夢が、抽出できたように思われる。それは、確かに劇が終われば覚める、果敢ない夢であろう。しかし、多くの優れた喜劇はこの夢を追いか求め、この夢の周りに結晶したといっても過言ではあるまい⁽¹²⁾。そして、「パーソロミュウ市」でジョンソンが見せてくれたこの得難い夢を、我々は、覚めてからも長く忘れないだろう。

注

- (1) 典型的例としては、Ian Donaldson が、*The World Upside-Down* (Oxford: Oxford U. P., 1970), pp. 46-77 で、彼らの試練を、キリスト教的寓意と結び付けて考察している。その他、Ray L. Heffner, Jr., “Unifying Symbols in the Comedy of Ben Jonson” (1954), in *Ben Jonson; A Collection of Critical Essays*, ed. J. A. Barish (Englewood Cliffs: Prentice Hall, 1963), pp. 133-146; Jackson Cope, “*Bartholomew Fair* as Blasphemy”, *Ren. D.*, VIII (1965), pp. 127-52; Guy Hamel, “Order and Judgement in *Bartholomew Fair*”, *UTQ*, 43 (1973), pp. 48-67 などの諸論文を、参照されたい。
- (2) 通過儀礼について、始めてまとまった形で論述したのは、フランスの人類学者 Arnord von Gennep で、彼の著 *The Rites of Passages*, trans. M. B. Vizendom & G. L. Caffee (Chicago: Univ. of Chicago Pr., 1960) は、今なお大きな影響を与え続けている。また最近では、ヴィクター・ターナーが、『儀礼の過程』(思索社、1976年)や、『象徴と社会』(紀伊國屋、1981年)で、通過儀礼の問題を精力的に論じ、注目すべき独自の文化理論を発展させている。
- (3) cf. ターナー、『儀礼の過程』, pp. 124-5.
- (4) 尚、三者を対比的に論ずるという発想、およびその手順については、Richard Levin, “The Structure of *Bartholomew Fair*”, *PMLA*, 80 (1965), 172-9 の、優れた作品構造分析から、多くの示唆を得た。
- (5) テキストは、*Bartholomew Fair* ed. E. M. Waith (New Haven & London: Yale U. P., 1963) による。
- (6) この “game of vapors” に関する最近の研究としては、L. A. Beaurline の *Jonson and Elizabethan Comedy* (San Marino: The Huntington Library, 1978), pp. 217-30 が優れているので、参照されたい。そこに “academic dispute” の型を読み取る手際は、実に鮮やかなものである。
- (7) ターナー、『象徴と社会』, p. 267.
- (8) 例えば、I. Donaldson は、前掲書で、このワスプの台詞をもって、劇の主題を代表させている。
- (9) cf. New Mermaids 版 *Bartholomew Fair* ed. G. H. Hibbard (London: Ernest Benn Limited, 1977), p. 174 fn. では、この清教徒達の非難の根拠が、旧約聖書の Deuteronomy, xxii. 5: “the woman shall not wear that which pertaineth unto a man, neither shall a man put on a woman’s garment: for all that do so are abomination unto the Lord thy God.” という一節にあることが、指摘されている。
- (10) 例えば、New Mermaids 版の編者は、序文でビジーの改心が “inconceivable” (p. xxiii) だと指摘するのだが、筆者は、本稿によって、それが喜劇的ではあっても、十分 “conceivable” であることを、示し得たと思う。
- (11) ターナー、『儀礼の過程』, p. 127.
- (12) こうした理想的共生関係の夢は、シェークスピアがその祝祭的喜劇群で、繰り返し描いたところのものである。従って、それらを考察する際、本稿同様に、通過儀礼という枠組みを用いることの有効性は、当然予想されるところであろう。そしてまた実際に、例えば L. E. Booth, “The Father and the Bride in Shakespeare”, *PMLA*, 97 (1982), 325-47 とか、F. Falk, “Drama and Ritual Process in *A Midsummer Night’s Dream*”, *Comparative Drama* 14 (1980), 263-79 など、ジュネップやターナーの理論を大胆に取り入れた成果が、最近出始めている。